

空間史学研究会編

『痕跡と叙述』

(空間史学叢書 1)

岩田書院 一〇一三・一一刊

A5 一二三頁 二八〇〇円

近年、建築・絵画・仏像・舗設を総合した空間と、仏教儀礼などの営みを包括的に扱う研究が活発である。本書は、多様な領域から「空間」を研究する方法論の確立を目指して、二〇一〇年に発足した空間史学研究会が編集する論集の第一号である。まず「空間」に対する研究を牽引してきた三者が報告したシンポジウムを基にした論文が掲載されている。

近年の歴史研究は、なぜ「空間」に着目するようになったのか。「神・彼岸・コスモロジー—歴史学における「空間」の発見」(佐藤弘夫・思想史学)は、この点を研究史から明らかにする。近代の歴史学は「時間」を最重要課題としたが、七〇年代後半に社会史が隆盛を迎える中で、「空間」の重要性が再認識された。ある時代の日常に流れていた音、その場を満たしていた色彩と匂いとは。人間の生活に即したりアルな空間再現が探究されるようになる。しかし、前近代の生活は、近代人の認識する空間とは全く異質であることに留意しなくてはならない。その例として、歴史学においてカミの問題を正面から見据えた網野善彦の研究に注目する。カミの存在を平板なものとする網野の論に対し、存在を実感できるも

のしかカミとして認知できない段階(八世紀)と、この世のカミの背後に根源的なもう一つのカミの世界を想定する段階(一三世紀)が存在したとする。一三世紀には、不可視のカミが膨張し、天皇が絶対的な権威にはなり得ない時代が到来する。前近代の人々をとり囲むコスモロジーは、各々に変容したことを認識する必要性を説き、それは権力等のあらゆる社会システムに影響を与えたとする。

「夢見と仏堂—その礼堂の発生に関する試論」(藤井恵介・建築史学)は、平安時代初期に、仏堂の前方に付設された「礼堂」の発生を論じる。礼堂を「人間専用の内部空間の成立」の画期とした井上充夫(『日本建築の空間』)に注目する。構造と機能を視点とした実証史学が中心であった戦前から戦後の日本建築史の中で、精神世界を背景に、空間の発達を読み解こうとした井上の方法論を再確認する。井上の論を継承し、新たに広隆寺に残る資財帳と実録帳を検討する。土間からなる仏堂の前方に板敷の礼堂が付加される変化を、『更科日記』の物詣の記述に求める。物詣は、靈験仏の近くに参籠して夢見を得ることが目的であり、仏堂内部に長時間滞在する必要があった。奈良時代末から平安時代初期にかけて、人々の仏への距離感に変化が芽生え、仏との交感を通して夢見を求め、礼拝方法が新たに誕生したとする。空間構成の発展と床の成立から機能の背後にあった人の感覚や心性の変化を把握しようとする。

「行為と感応の場としての空間—表象の読み方を考える」(長岡龍作・美術史学)は、美術が生まれ、使われ、伝えられる「美術の場」に

関心を寄せてきた著者が、美術という視覚的表象の特性を究明する。表象の重要な働きの一つを、「見えない世界」の可視化としており、「空間」の表象の読解には、表象が有する固有の文法とイデオムを理解する必要性を主張する。宗教における空間の意味とその表象を読む方法を解説し、山水（風景）の空間と山水の代替となる表象（庭園・絵画）から、現象世界の背後を絶えず意識する心性は前近代の東アジア世界には広範に存在していたとする。

さらに、各領域の若手研究者が最新の成果に基づき、各研究会で報告した六編の論文とフィールドノート一編が続く。都市にひそむ怪異と近代の胎動（大川真「江戸のつづれ家―尾張屋版切絵図と四谷怪談」）、中国文化の日本への土着化の系譜（野村俊一「山水の生成とその諸空間―中世禅院における境致と社友の考察を通して」）、一五から一六世紀イタリアの芸術における自然科学や都市空間の組織化など（石澤靖典「煉獄という空間―一五―一六世紀のダンテ受容にみるその組織化と視覚表象」）、空間を視点に歴史の転換に光を当てるもの。仏像の光背表現の意匠の展開（海野啓之「仏像光背考―ほとけ・像・人の場と空間」）、古代ローマとルネサンスの建築書と建築作品に示された空間認識と設計手法など（飛ヶ谷潤一郎「アルベルティの『建築論』における「スパティウム（空間）」の用法」）、造形から先人達が心に抱いた世界観を浮上させるもの。王朝文学の場から女君達の生を俯瞰的に把握するもの（岩原真代『源氏物語』賀茂祭の物見空間と正妻―棧敷の座と紫の上造型）。教会堂と内部の絵画様式がその土地と聖堂のいかなる政治的意図の基で選択され機能したかを検討するもの（佐々木千佳「トルチェッロの聖母―都市の記憶、空間の記憶」）。本書に

は、「空間」を視点とした研究の拡がりも豊かさがそのまま示されている。

冒頭佐藤氏の論文は、二〇一一年の震災にふれ、復興には、歴史的空間の総体的な再構築という視点が不可欠であり、それは、近代化が断ち切った人と周囲との絆の回復につながるかと総括している。空間史は、歴史的空間を通して、過去の人々の生と周囲との関係性を描き出し、生き生きと伝えてくれる魅力あふれる視点である。現代では忘却された多様な価値観を、領域を超え認識し共有する場として、本研究会の活動に期待したい。（赤澤真理）